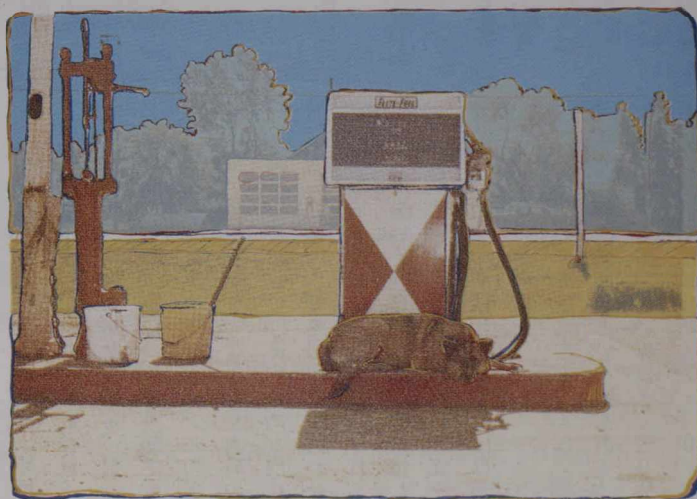




ウェイーン・イーストコット「HAKONE 2」(シルクスクリーン, 1980年)



ウィリアム・ラブチャック「Neepava Noon II」(シルクスクリーン, 1979年)

仕事場は他にもある。例えば版画制作の共同ワークショップである。版画家グループが団結し、スタジオの空間や設備を共同使用するのだが、異なったニーズや制作姿勢に應えるため、一九七三年モントリオールで「グラフィア」が発足した。これは言わば共同体で、メンバーは平均十人前後である。グループを作る一番の理由は、空間や印刷機の共同使用という経済的利点であり、その他の共通項は、版画制作の各過程を自らの手で行うといったことぐらいしか見つかからない。

美術学校の版画部も良き仕事場だ。アルバータ大学でワルター・ジュールの主宰する版画部の他、カルガリー大学、バンフ美術学校、ウインザー大学、バンクーバー美術学校等にある。こうした版画部と共に、自前で印刷機等の設備を揃える資力を持つ版画家達の個人スタジオも優秀で、多作の版画家が育つ格好の仕事場となっている。また、大半の版画家が学校に関係していることも、興味をひく事実である。

都市での美術活動から遠く離れた北極圏のイヌイット(エスキモー)の間で、革アププリケや象眼細工、象牙や石膏を使った彫刻などの伝統工芸を母体とした版画技術が台頭してきた。一九五八年の第一回版画展以来、イヌイットの版画を愛好する人々は増加の一途を辿っている。

はじめてイヌイットに版画を奨励した功労者は、ジェームズ・ヒューストンである。木版技法(北極圏では木材は皆無に等しく、磨いた石材を用いた)から始めて、次に乾燥したあざらし皮を代用したステンシル・カットへと進んだ。一九五八年にはケーブ・ドーセットの部落に、版画のワークショップを作るところにまで漕ぎつけた。イヌイットの版画家達が日本の伝統的版画制作技術から多くを学びとれるに違いないと確信したヒューストンは、一九五八年から五九年まで日本に滞在し、一時平塚運一に師事した。イヌイットの地に帰ってからは、彼はケーブ・ドーセットの版画家達に技術面で